

高齢者疑似体験演習を生かした 老年看護学実習での学びに関する検討

— 学生の記録の分析を通して —

宮路亜希子¹, 大淵 律子¹, 平松万由子¹

Abstract

In order to define the effect which role-play as the elderly in a simulation experience in sophomore on the gerontological practical training in junior, we analyzed mentioned contents in A report after the gerontological practical training, in a view point with the understanding the elderly and development to the care, mind.

The result was classified;

- 1) Having watched that the real life of the aged and remembered the simulation.
- 2) Having make care plan and carried in mind a real support scene.
- 3) Having felt the whole.

The simulation experience enabled apprentices to understand and acquire the following;

- The physical phenomena of aging
- The physical changes influenced by senescence and how these conditions affect daily life or daily occurrences of persons of advanced age.
- The ability of apprentices to make allowance for various physical handicaps.
- putting the ability above-mentioned into practical use, apprentices getting on well with the elderly and ad hoc measures and their improvement on how to communicate with one another.
- apprentices' invention of individual and creative way of gerontological methodology that I can their own by their trial and error before the elders.

To be able to make sure this learning in training more, it is necessary for a charged teacher to give them advice that in a scene of the real care timely in the gerontological practical training guidance.

Key Words: role-play as the elderly in a simulation experience, Gerontological nursing practical training, Understanding for the elderly, Practical training guidance

I. はじめに

高齢者との年齢差が大きく、また核家族化により身近に高齢者と接する機会が少なくなった学生が、加齢現象を来たしている高齢者の心身の特徴をふまえて、看護専門職として、老年看護の基礎的な知識を身につけて発展させていくということには困難があり、教育の工夫が必要である。そこで老年看護学領域では、高齢者疑似体験演習（以下疑似体験演習と省略する）を

効果的に取り入れることや、領域別実習で実際の高齢者を受け持ち、対象の理解を深められるように工夫している、という報告がすでに多く見られている。例えば橋本らは¹⁾、学生が「高齢者役」と「介護者役」の両方を体験することで、日常生活動作の上での不自由さや高齢者になることへの不安を感じ、その上で介助者の重要性が認識できてきたとしている。また相羽らは²⁾、疑似体験演習を行なうことで、高齢者への理解が、漠然としていたものから具体的な援助を考え実施

1. 三重大学医学部看護学科

するという態度へ変化をもたらしたとしている。そして柿川らも³⁾、疑似体験演習を取り入れることで、学生が身体的側面や、精神的・情緒的な側面での理解を深めているとし、老年看護の授業展開において効果があったと検証している。

また、高齢者と実際に関わる臨地実習の場での学びと疑似体験演習との関連についての評価の報告も見られる。岩鶴らは⁴⁾、疑似体験演習と老人看護実習との影響について、一般的な高齢者の身体特性を理解するための疑似体験演習と、高齢者の健康問題を把握し、必要な看護を実践する病棟での老人看護実習において、疑似体験演習での学びを思い出し、個別性の大きさを実感しながら高齢者一人ひとりに合わせたケアを実施していたと述べている。また中村らは⁵⁾、疑似体験演習を行なったのちに老年看護学実習の場で実際に高齢者に接することで、高齢者の機能低下による日常生活での影響の大きさや心理的側面についての理解が深まり、それが援助につながっており、さらに実習に役立つような学内での講義、演習の進め方を検討すべきであると述べている。

本学における高齢者疑似体験演習は、2年次後期の講義とあわせて高齢者の理解をより具体的に進めることを目的に継続して実施してきた。

高齢者の知覚機能、身体機能の変化による日常生活における不自由さを体験すること、その体験によって高齢者の心理への気づき、環境調整の意義や必要性を知る機会とすること、また、それらの気づきをケア提供者として活かしていく視点を養うことを目標としてきた。

そのため、高齢者の基本的な日常生活を想定した環境の中で、コミュニケーション、食事、排泄、清潔、移動・移乗などについて高齢者疑似体験セットを装着して実施し、援助者との関わり、環境との関連も含めて、実生活からの気づきを多面的にできるようにした。

さらに、3年次の老年看護学実習 I における、対象理解のうち、高齢者の日常生活における機能評価が適切にできること、対象の機能に合わせた環境調整、援助場面における高齢者の個別性を踏まえた関わり方、対象の心理・精神状態への関わり方への配慮、工夫に繋げられるように想定して実施してきた。

これまででは、疑似体験演習での学びを実習で活かすということは学生自身の自主性に任せており、実際の高齢者に関わるときにどのような気づきがあって、更に自分のケアを高めていくために疑似体験演習での学びが役立ったと認識しているのかを関連づけて分析したことはなかった。

そこで、本研究では、本学で行なっている高齢者疑

似体験演習での学びを学生自身がどのように老年看護学実習で活かすことができたか認識しているのか、実習終了後のレポートの記述から、どのように具体的に実習の場で生かされているのかという視点で高齢者疑似体験演習の学びを分析し、考察したので報告する。

II. 目的

学生は高齢者疑似体験演習の学びをどのように活かせたと考えているのか、その気づきの内容を明らかにすることで今後の高齢者疑似体験演習および老年看護学実習を発展させるための一助とする。

III. 方法

1. 研究期間：2005年11月から2007年3月（2年次後期から3年次後期）

2. 研究対象：A大学医学部看護学科生で2004年入学生のうち、2005年度に高齢者疑似体験演習を実施し、かつ2006年度に老年看護学実習 I を履修した学生76名。

3. 方法

1) 高齢者疑似体験演習について

(1) 目的：高齢者の日常生活における不自由さの体験によって、高齢者の心身の理解を進めると共に、看護職者としての援助のあり方を考える⁶⁾。

(2) 疑似体験演習の方法

学生2人が一組となり、疑似体験演習セットを装着した高齢者役と介助者役を交替で行なう。エレベーター・階段・玄関前広場などを、疑似体験演習セットを装着して、歩行又は車椅子に乗って、高齢者の日常生活援助に関するさまざまな動作を体験する。高齢者役の学生は、不自由さやその時の気持ち、介助者役はどのように高齢者への配慮をしていけばよいかを考えながら介助する。体験する内容（・・・をやってみよう）を提示しながら、適宜教員が声をかけて、留意点などを意識つけられるようにする。具体的な体験の内容は表1に示す。

表1 体験の実際

食事動作など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 箸やスプーンを使って摂食動作をしてみよう。箸で豆をつまんで皿に移し変えよう ・ コップ・湯のみ・持ちやすい柄つきコップで飲む動作をしよう ・ プルトップ缶やペットボトルを開けて飲んでみよう ・ あめの小袋を破って不潔にならないよう、手で触れないで食べよう ・ 賞味期限を見てからプリンのラベルをはがして食べてみよう ・ ストローをさして飲んでみよう ・ 口の大きさの違う瓶の蓋を開けてみよう（自助具も使ってみよう）
入浴動作・手洗い・洗面動作など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 浴槽をまたいで出入りしよう ・ 浴槽内でしゃがんだり立ち上がってみよう ・ 手すりや入浴ボード、踏み台を使って出入りして比べてみよう ・ シャワーチェアに座って体を洗うまねをしてみよう ・ シャワーとカランの切り替えや温度表示がどのように見えますか ・ 洗面所で手を洗ってみよう、水を出すことができますか ・ 歯ブラシで歯を磨いてうがいしよう ・ 鏡で自分の顔や歯は見えますか
排泄動作など	<ul style="list-style-type: none"> ・ トイレまでの移動は安全にできますか ・ 向きを変えて便座に座ることができますか ・ ズボンの上げ下ろしはできますか ・ 便座からの立ち上がり動作はどうですか ・ 手すりをうまく使えますか ・ トイレトペーパーはうまく切れますか ・ 排泄後トイレトペーパーで拭く動作はできますか ・ 温水洗浄パネルは見えますか、使えますか ・ 排泄後汚物を流すことはできますか ・ 排泄後洗面所で手を洗うことはできますか
着脱動作など (手の巧緻性関連)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関節可動域に制限がある中での衣服の着脱はどうしますか ・ ボタンのつけはずしはきちんとできますか ・ ファスナーは開け閉めできますか ・ 紐を結ぶことはできますか
移動・移乗動作など	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベッドでの寝返りはできますか ・ 起き上がって端座位になることができますか ・ ベッドから車椅子への移乗動作をしてみよう ・ さまざまな椅子からの立ち上がり、床に落ちているものを拾ってみよう ・ 平坦なところを杖をついて歩いてみよう ・ 平坦なところを車椅子で自走してみよう ・ 段差解消のリストの昇降を体験してみよう ・ スロープを車椅子で昇り降りしてみよう、また介助してもらってみよう ・ 道路を車椅子で自操してみよう ・ 車椅子でエレベーターの昇り降りをしてみよう ・ 杖をついてスロープを歩行してみよう ・ 杖歩行での階段昇降をしてみよう ・ 歩行器で歩いてみよう
視覚・聴覚などコミュニケーションに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・ 廊下にある表示を見てみよう ① 新聞・広告・雑誌・広報を見てみよう。 ② 電話帳で○の電話番号を探してみよう（問題を出す） ③ 暗いところで新聞を見てみよう。明るいところとの見え方の違いはどうか ④ 色の組み合わせにより、どのように見えるか見てみよう。どの色がわかりやすいですか ⑤ 電話を掛け合って話してみよう ⑥ もしもしホーンを使って話してみよう ⑦ 聴太郎を使って雑音の入り方も体験しよう
その他日常生活に関すること（手の巧緻性関連）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振込み用紙に必要な事項を全部記入してみよう ・ 財布から小銭を取り出して貯金箱に入れてみよう ・ はさみで紙や紐を切ってみよう

(3) 必要物品

高齢者疑似体験演習セット

これらには特殊眼鏡・荷重チョッキ・肘および膝サポーター・靴型サポーター・手首および足首のおもり・手袋（ディスポおよび軍手の二重にはめる）・耳栓・杖がセットになっており、装着することでおよそ80歳程度の身体機能に近づけることができる⁶⁾。本学では片麻痺の体験ができるセットと両側の筋力低下の体験ができるものの二種類を使用する。

表2 不自由さを体験するための設備、道具その他

手の機能 関連	食事・水分摂取に関するもの：箸（ぬり箸・割り箸・握力低下用の箸） ・スプーン（握りの様々な種類） ・コップ・湯飲み・食器（すくい易い傾斜付き皿） ・プルトップ付き缶入り茶・ペットボトル・ストロー付きテトラパックの飲み物・プリン・煮豆・スナック菓子・小袋入りあめ・空瓶・缶オープナー・万能ハンドル 日常生活に関するもの：振込み用紙および鉛筆（字を書く） ・種々の財布（小銭入り） ・募金箱 ・はさみ ・ボタン付きカーディガン ・ビニール紐 ・各自の携帯電話など
視覚関連	新聞・雑誌・広報・電話帳・拡大鏡・照明付き拡大鏡・多色の色紙・照明の違い
聴覚関連	耳栓・もしもしホン・聴太郎・各自の携帯電話
移動動作 関連	ベッド（移動介助バー付き） ・車椅子・歩行器・洋式トイレ（手すり付き） ・洗面所（鏡付き） ・浴室（簡易手すり付き浴槽・浴槽ボード、浴槽の台・シャワー・シャワーチェア） ・段差解消リフト・スロープ・階段・エレベーター（看護学科棟内、実習室を利用）

学生は上記のような体験をして高齢者役および介助者役として考えたことを高齢者疑似体験演習記録用紙に記述し、確認する。記述後回収する。

2) 老年看護学実習 I

領域別実習の一環として、3年次に全員が老人保健施設で2週間の実習をする。5人が1グループとなり、各自一人の高齢者を受け持ち日常生活援助に関わりながら、対象を全人的にとらえ、個別の高齢者の特徴をふまえて、対象理解を深めて健康面から支援し、高齢者の生活の質を高めるケアを実際に展開する。目標は表3に示す通りである。

表3 老年看護学実習 I の目標

1. 老化の進行や健康上の課題を持ちながら生活している対象を全人的に把握できる
2. 高齢者の生活場面から健康援助の必要性がわかり看護の目標を明確にできる
3. 高齢者の実生活から健康援助の方法を立案し、実施できる
4. 高齢者の生活場面で、実施した看護について評価できる
5. 在宅高齢者通所サービスセンター等の活動に参加し、高齢者の在宅支援の方法とその効果を理解できる
6. 高齢者ケアの場における保健・医療・福祉職員との連携や協力の必要性を理解できる

3) データ収集方法

3年次の老年看護学実習 I の開始日に、2年次に記述した疑似体験演習記録用紙を返却し、体験した記録を読み返しなが各自の学びを思い出して関われるように助言する。実習担当教員は、実習中に、随時体験を思い出すことができるような声かけを行なう。

実習終了後の記録提出時に、表4に示す質問紙に記入し提出してもらう。どのような場面で活かせることができたと思うか、なるべく具体例を挙げて自由に記載してもらう。

4) データ分析の視点

この疑似体験演習を活かしたかを記述した具体的な内容の中身を分析し、どのような学びがあったのかを検討した。分析の視点としては、高齢者の老化による機能評価の把握・それに伴う不自由さなどの心理面の把握とそれに伴う生活への影響への理解・個別のケアへの発展、創意工夫など学生の気づきという3つを踏まえながら、学生の気づきの中で共通する内容を抽出して分類し、研究者間で検討を続けた。

表4 実習後記述するレポート

1. 2年次の高齢者疑似体験での気づきを実習で活かせることができたかどうか伺います。 1) 活かすことができた 2) まあ活かせた 3) あまり活かせなかった
2. どのような場面で活かせることができましたか。なるべく具体例を挙げて自由に記載して下さい。

4. 倫理的配慮

2.で述べた3年次学生に、実習記録と一緒に疑似体験での気づきレポートを提出してもらうこと、個人が特定されないように研究的にまとめ、今後の演習や実習に活かすこと、この気づきレポートは実習の成績評価項目には入っていないこと、同意しなくても学生に不利益が生じることのないことを文書及び口頭で説明し、確認の署名をもらってから分析を行なった。

IV. 結果

1. 疑似体験演習を老年看護学実習 I で活かせたと感じたかどうかについて

活かすことができたと回答したものは28名(36.8%)、まあ活かせたとしたものは43名(56.6%)で、活かせたと認識しているものは合わせて93.4%である。あまり活かせなかったとしたものが5名(6.5%)であった。

2. どのような場面で活かせたと感じるかについて

自由記載の記述から学生が活かせたと考えているところを抽出した記述は215件であった。それらを、疑似体験演習記録用紙の様式に合わせて、手の機能や見え方、聞こえ方という項目で大別した。手の機能に関するものは20件、見え方に関するものは24件、聞こえ方に関するものは44件、移動に関するものは46件、車椅子移乗については30件、心理面では18件、その他では28件あり、またあまり活かせなかったとしたものが5件あった。さらにこれらを、対象理解として、高齢者の老化による機能の低下の把握・それに伴う不自由さなどの心理面の把握・個別のケアへの発展として学生の気づきの程度という視点に注目しながら分類を続けた。結果として「高齢者の実際の生活を見て体験を思い出し実感したこと(ああ、そういえばそうだったな!という気づき)」「ケアプランを立てて実際の援助場面で心がけたこと(体験を踏まえこうしたらより利用者に沿ったケアになると考えて具体的に配慮したこと)」「全般を振り返り感じたこと(高齢者のケアではこんなことが大切なんだ)」の3つに大別することができた。

以下に代表的記述を示す。括弧内はそれと類似した内容の件数を示す。

1) 「高齢者の実際の生活を見て体験を思い出して実感したこと」

(1) 手の機能に関すること (20件)

・梅干しの蓋をうまく開けられず、私が開けたらそんなに力を入れずに開けられた。疑似体験演習では、そういえばなかなか開けられなかったなど、高齢者

の手の機能はこうなんだと理解できた。(5件/20件中)

・衣服の着脱などで手先に力が入らなくてボタンの開け閉めができなかったり、喫茶のとき財布からお金が出しにくかったりするなど、私たちがやりにくかったことが実際にあった。(4件/20件中)

・新聞を捲るとき、自分が疑似体験演習で体験したこと(3枚くらいをまとめて捲ってしまう)があり、利用者の気持ちを理解することができた。(3件/20件中)

(2) 見え方に関すること (24件)

・白内障を体験できる眼鏡を使用したときにとっても見えづらかった。(4件/24件中)

・視力が低下することで、生活の場を書いてある文字表示が読めず、周囲の状況がわからなくて、刺激が少なかったと思った。(4件/24件中)

(3) 聞こえ方に関すること (44件)

・耳栓をして会話をしたときのことを思い出した。耳栓をすると聞こえにくくて、「何て?」と何度も繰り返すうちに会話をするのが面倒になってしまった。高齢者に面倒だと思わせてはいけないと思い、低く大きめの声ではっきりと話すようにした。(5件/44件中)

(4) 移動に関すること (46件)

・座位→立位の大変さを私が体験でやったのと同じような感じでお尻を重たそうに上げていたのが印象的でした。(5件/46件)

・浴槽では椅子に座ったほうが楽だと体験で学んだ。実際利用者さんがそうしていた。(5件/46件)

(5) 車椅子の介助に関すること (30件)

・ちょっとした段差や道の凸凹など歩いている人にとっては殆ど気にならない段差でも、車椅子の人にとってはとても大変なんだと感じていたの、そのようなときは押してあげた。(6件/30件中)

・(車椅子に座っていると)視線が私とは違うということでゆっくり移動した。(3件/30件中)

(6) 心理面に関すること (18件)

・心理面のところで、体験をしたとき、自分が介助してもらおうのが悪いという思いをしてしまったり、迷惑かけて嫌だなあと感じたことを思い出した。体験で痛かったりつらかったりしても我慢してしまうことがあった。利用者さんも「迷惑かけてごめんね」と言っていた。同じような思いを抱いていたのかもしれない。(4件/18件中)

2) 「ケアプランを立て、実際の援助場面で心がけて実施したこと」

(1) 手の機能に関すること (20件)

- 手洗いの際、さっさと洗わせてしまうのではなく、相手のペースに合わせて行なうことができた。(3件/20件中)
- あやとりをしている場面で、親指にかかっている紐だけをはずそうとして他の指にかかっている紐まではずれてしまう場面で対象の手の巧緻性を把握できた。(4件/20件中)

(2) 見え方に関すること (24件)

- 裁縫や折り紙を一緒にやった際、糸を布地と同色にしてしまったり、折り紙の色を何気なしに余っていた黄色にしてしまい、見づらいものにしてしまったと気がついた。(6件/24件中)
- 正面のものは比較的に見えやすいことがわかっていたので、何か見て欲しいものがあるときや、話しを聞くとき、食事介助時の食器の位置などは利用者のなるべく正面になるように心がけることができた。(3件/24件中)
- 白内障などで視力が低下し、段差や障害物に気が付かなかったり、危険を予測して回避することができないので、転倒、転落のリスクが高いということを感じた。(3件/24件中)

(3) 聞こえ方に関すること (44件)

- なるべく近づいて低めのトーンではっきりと簡潔に、またジェスチャーを加えながら話す工夫をすることができた。(8件/44件中)
- 雑音と人の声の聞き分けが難しいと思い出したので、騒がしいフロアでは聞き取り易い耳側で、大きくゆっくりはっきりと話すようにし、大事な話は自室に戻すようにした。(8件/44件中)
- 「もしもしフォン」を利用したり、大きくゆっくり、低い声で話すのが聞き取り易いと、疑似体験演習で知っていたので、うまくコミュニケーションがとれたのでとても役立った。(3件/44件中)

(4) 移動に関すること (40件)

- どうやったら立ちやすいかを考えながら支えることができた。体験では一人で立つことは関節が動かしにくく、困難であったため、腰を支え転倒しないよう後ろに立って援助した。(9件/46件中)
- 車椅子や歩行器使用の人の散歩に付き添ったが、本人のペースに合わせて歩くことができた。(7件/46件中)
- 体験でトイレトペーパーでお尻を拭くという行為がしんどくて、手すりがあるとかなり楽だと感じたので、トイレ介助を行なうときに、できるだけ手すりの使用を促すことで、ご自分でできるようになった。(4件/46件中)

- お風呂は滑りやすいし、支えも少なく、支えてあげたときにしっかり私の腕をつかむ姿を見て、不安なのだなと高齢者の気持ちに気づくことにつながった。(3件/46件中)

(5) 車椅子の介助に関すること (30件)

- 車椅子から見える景色、段差を越えるときの感覚、スピードから感じる感覚、坂の上がり下がりの感覚、座席の座り心地、後ろに動く感覚、車椅子への移動など体験したものを実際行なった。車椅子に座っているときの目線、スピード、座り心地を踏まえた上で、段差を越える前に「ちょっとがたっとします」と言ったり、「回転します」と声かけをしてから車椅子を動かすようにした。(7件/30件中)
- 浴槽に入るとき、スロープになっていて、下りる時、上る時の車椅子の向きを考えると疑似体験演習を役立てることができた。(4件/30件中)

(6) 心理面に関すること (18件)

- 援助を行うと、「すみませんなあ、こんな体やもんで」という言葉を何度もおっしゃられた。本人は笑いながら言っていたけれど、心の中では、「申し訳ない」とか自責的になっているのだろうと思った。「気遣わないで下さい」とか、「○さんは頑張っていますよ」とか言葉がけがとても大事なのだと思った。(5件/18件中)
- 受け持ちではなかったが、何度も同じ訴えて詰め所に来る利用者がいた。対応に困り、適当に返事をしてしまおうかと思ったが、高齢者の心理面の気づきのレポートで、「視覚・聴覚が低下しているために孤独を感じた」とあったので、この利用者が訴えているのは不安が強いためではないかと考え、まずは談話室で一緒にお話をしようと考えることができた。(3件/18件中)

3) 「全般を振り返り感じたこと」

(1) 手の機能に関すること (20件)

- 遊びや作業をするときに、どの範囲から介助が必要かを考えるときに、この体験での気づきを利用することができた。(3件/20件中)

(2) 見え方に関すること (24件)

- 白内障などで視力が低下し、段差や障害物に気が付かなかったり、危険を予測して回避することができないので、転倒・転落のリスクが高いということを実感した。(4件/24件中)
- 本当にはどのように見えているのかその不自由さは計り知れませんが、疑似体験演習で眼鏡をつけて色々な作業と体験していたのでどのような感じかは想像ができ、どのような援助を行なえば良いのか考える

- のに役立つ。(4件/24件中)
- 遊びや作業をするときに、どの範囲から介助が必要かを考えるときに、この体験での気づきを利用することができた。(3件/20件中)
- (3) 聞こえ方に関すること (44件)
- 私の言ったことが伝わっていないときに、この人は理解できないんだと考えるのではなく、耳が聞こえにくいのかな、声の大きさを変えたらいいのかな、という判断ができることにつながったと思う。(7件/44件中)
 - 全介助の利用者だったが、コミュニケーションを取る際は大きい声で話しかける、顔を近づけて声かけを行なうなどという形で活かすことができた。(4件/44件中)
- (4) 移動に関すること (46件)
- 老化による筋力、骨格系などの変化により、自由に身体を動かすのが困難で、視覚、聴覚などの機能も低下するため、ただ歩くということがとても大変になる。少しの段差や障害物がないか、など安全面を注意することの大切さがよくわかった。(4件/46件中)
 - 見えにくさと聞こえにくい状態で情報が少ないまま行動しなければならないことがすごく恐いことを体験していたので、細かなことを伝えていくことで、利用者が不安を少なくして行動できるように気をつけることができたと思う。(4件/46件中)
- (5) 車椅子の介助に関すること (30件)
- 車椅子を押すときに恐怖感を与えないように、声かけしたり、ゆっくり押すようにしたり、物に当たることがないように気をつけた。(5件/30件中)
 - 少しの段差でも恐いと思ってしまうことや、車椅子ですこしスピードを出しただけで恐くなることなど、相手の不安な気持ちを軽減するよう取り組むことができた。(5件/30件中)
- (6) 心理面に関すること (18件)
- 疑似体験演習の記録の中で、「動作がうまくいかず、一番つらいのは高齢者であることをいつも忘れないようにしたい」と自分で書いてあったのを実習中に見て、改めて謙虚な気持ちで接さなければと思った。(4件/18件中)
 - 高齢者はわからない事柄に対して、隠したい、恥ずかしいという感情を抱きやすくなって、尋ねたり、頼むことができないということも、疑似体験演習をやったので、そういった点にも配慮して声かけを行なえた。(3件/18件中)
- (7) その他 (28件)
- 私にはできることが相手はどうしてできないのか、

- 理解できないことはとてもさみしいことだと思うので、事前に体験しておいてよかった。(2件/28件中)
- 残存機能を低下させないようにするためには、対象のペースに合わせて介助者の「待つ」姿勢が大切であることを学んでいたため、それを思い出しながら接することができた。(1件/28件中)
 - 教科書だけでは漠然としているけれど、自分でやってみただけでイメージがしっかりとつき、対象の方や周りの方の行動などを見て、どういう援助をしてあげたらいいのかを自然に考えられたと思う。(1件/28件中)
 - 可能なら実習直前や実習1日目に行うことができたからより具体的にケアに活かせるのではないかなと感じた。(1件/28件中)

V. 考 察

本研究の分析の視点である高齢者の老化による機能評価の把握・それに伴う不自由さなどの心理面の把握とそれに伴う生活への影響への理解・個別のケアへの発展として学生の気づきに基づき、実習の場で実際の高齢者へケアを行ないながらどのように学び深めているのか、また教員としてどのように演習や実習指導へ発展させていくことができるか、について、学生の記述より抽出された内容について考察する。

1. 「高齢者の実際の生活を見て体験を思い出し実感したこと」

これは、対象理解を進めていく上で、加齢による身体の変化への気づきを、自分たちが体験したことと照らし合わせてより深めているのではないかと考えられた。

教科書や講義、そして装具をつけて自分が疑似体験演習で体験したときに、不自由さを感じたり、困ったりした出来事の意味を考えて記録している。そして実際の高齢者を目の当たりにすることで、思い出し、「座位→立位の大変さを私が体験でやったのと同じような感じでお尻を重たそうに上げていたのが印象的でした」に代表されるように、「ああ、そういえばそうだった」、「やはり実際にそうなんだ」というような、身体機能が低下した状態を生きている高齢者の気持ちを深く実感できていたと考えられる。今後も更に疑似体験演習での気づきを実習の場で実感でき、ケアに発展させていけるような、効果的な演習の仕方と、実習中に疑似体験演習を適宜思い出してケアに活かせるような声かけの仕方の工夫を考える必要がある。

2. 「ケアプランを立て、実際の援助場面で心がけて実施したこと」

これは、個別性のある高齢者への援助の工夫と考えられる。学生は、手の機能、見え方、聞こえ方、移動について、特に援助する際に、自分がやりにくかったことを思い出して、加齢による身体機能の変化を考慮し、そして心理面についても考えながら、個別の機能に合わせたケアを考え、実施することに発展させていたといえる。

実習の現場では、高齢者とコミュニケーションのとりにくさで苦勞している学生は多い。受け持つ高齢者の知覚機能・認知機能は様々であるが、多くが視力障害を持ち、かつ難聴であり、また程度は違うが認知症がある。疑似体験演習では学生同志で実施するため、認知力の低下した状態で体験はできない。そんな中で、“疑似体験演習での聞こえ方や相手に話すときの声の大きさを思い出し、声の大きさや話す速度を意識して接していった”というように、苦勞しながら、高齢者の個別の機能に合わせた関わりをするべく、時には自分の関わり方を換えてみることでうまくできた、というふうに、体験したことを発展させていることが確認でき、本学の実習目標達成のためにも疑似体験演習が効果的に機能しているといえる。

また、質問の「どのような場面で活かせることができたと思うか、なるべく具体例を挙げて自由に記載」の内容のうち、車椅子介助に関する内容は、他の学びの内容とはやや異なっている。高齢者への配慮として車椅子に乗車することで感じる地面の凸凹からの振動への配慮の他に、“車椅子での介助（スロープの昇り降り等）は初めてではなかったのでよかったとか、入浴時のスロープの介助に役立った”など、疑似体験演習で体験していたことが実習でケアを展開することへの自信につながっているとも考えられる。

そして、移動動作に関連することとして“支えてあげたときにしっかり私の腕をつかむ姿を見て、不安なのだなという気持ちに気づけたことにつながった”のように、安全性を重視して相手を思いやり、安心感が得られるようなケアの提供へと学びを深められていたと思われる。

3. 「全般を振り返り感じたこと」

学生は体験を振り返りながら関わることで、コミュニケーションの方法や介助方法などを場面に応じて変えていることがわかる。その中で、ケア提供者中心ではなく、高齢者の立場から考えて看護できるように工夫し、うまく関わられたという実感をつかんでいると思われる。また、対象理解を進めるために、何とかして

この受け持ち高齢者のことを理解したいと思いつつ関わっている過程の中から、自分の関わり方、例えば“難聴の方とはなかなか意思疎通ができず、コミュニケーション方法を見直す必要があると感じた”のように、対象理解のために、自分の関わり方の工夫を重ね、学生自ら個別に高齢者への理解を深め、発展させていることがわかる。このように、実習という場で自分が高齢者を理解し、うまく関わられたと実感できる体験の積み重ねから、さらに高齢者への看護観を高めていくことにつながっていけるような教員の関わりが重要である。

4. 今後の疑似体験演習と実習への示唆

岩鶴ら⁴⁾は、老人看護学演習と実習との関連について報告している。実習後の学びとして「支持的な態度で見守った」や「どうすれば安楽になるのか考えることにつながった」や「高齢者のペースの理解につながった」など結果の本質は本研究と類似している。疑似体験演習の内容および実習環境は大学によって多少異なるものの、学生が学んで感じているところはほぼ共通していることがうかがえる。本研究においては、手の機能やコミュニケーションに関すること、移動移乗など、具体的な場面を思い起こして記述する方法をとっているため、より具体的な生活援助場面での、学生自身の援助の体験が理解しやすく、今後、幅広い高齢者観を育てていく指導へ結び付けていけるのではないかと考える。

今回 93.4%の学生が実習の場で活かすことができたことと認識しており、体験したことを自分のケアにつなげることができたことと実感していたことから、本学における疑似体験演習は高齢者理解のために効果的であることが今回の研究でも確認された。安酸は⁷⁾、経験型実習教育を提唱しており、その中で、「学生が自らの経験から学ぶ力を高めるためには、学生自身が気になったり、困ったりした出来事の意味を考え、その解決のための方法を探求していくことが必要である」としている。高齢者がより自立して、安全に生活してもらえるような看護者となるために疑似体験演習—老年看護学実習での気づきを再確認することは、疑似体験演習での学びを発展させた老年看護学実習との両方の体験を看護する力を高めることにつながるのに有効であると考えられる。

その反面、活かすことができたという実感が持てなかった学生も 6.5%いた。疑似体験演習が老化による身体機能の変化を日常生活から理解する、ということに焦点を合わせているため、実習での受け持ちによっては、かなり重度の認知症であり意志の疎通が困難であったり、移動にかなりの介助を要する場合や、

ADLはほぼ自立しているが認知力の低下があるような高齢者を受け持った場合には、自身が体験したことを直接活かせた実感でできにくいこともあると考えられる。これは学生が、高齢者の老化による基本的な身体面の変化について、疑似体験演習での気づきを発展させて実習の場でケアに生かす力量が不足しているためと考えられる。それを補うために今後、実習の中で、教員自身がその学生の疑似体験演習レポートの気づきの内容をよく読み、関わりの場面で助言を行なっていくなどの工夫をし、疑似体験演習での学びを実習現場で深めるための糸口を学生と一緒に探り、考えていくことでより効果的な指導につながるのではないかと考える。

また、実習目標と照らし合わせると、例えば1)「高齢者の実際の生活を見て体験を思い出し実感したこと」では、(2)見え方の“視力が低下することで、生活の場を書いてある文字表示が読めず、周囲の状況がわからないので、刺激が少なくなってしまう”のように、実習目標1. 老化の進行や健康上の課題を持ちながら生活している対象を全人的に把握できるおよび、2. 高齢者の生活場面から健康援助の必要性がわかり看護の目標を明確にできる、に相当する学びを学生の言葉で表しているとも考えられる。2)「ケアプランを立て、実際の援助場面で心がけて実施したこと」の場合は例えば、(4)移動に関することで、“トイレトッパーでお尻を拭くという行為がしんどくて、手すりがあるとかなり楽だと感じたので、トイレ介助を行なうときに、できるだけ手すりの使用を促すことで、ご自分でされることが可能になった”に代表されるように、高齢者の実生活から健康援助の方法を立案し、実施できたと学生が感じているといえる。実習の場においては、演習と実習を関連させてより立体的な学びをし、高齢者観を育てていくために、今後更に学生が疑似体験演習で学んだことを実習で感じ取り、学びとして記述するということが言語化することで実習目標を達成し、満足度の高い実習にしていくことが可能であると考える。

更に、疑似体験演習の内容としても、実習における様々なケア場面に近づけるような状況を工夫したり、学生の実習時期に近づけるなど演習を実施する時期においても、検討する余地はあると考える。

加えて、疑似体験演習を老年看護学実習に活かしたことの学びを今回は個別に記述してもらったのであるが、個々の学生の疑似体験演習での学びのポイントを教員が再度把握しておくことで日々のカンファレンスの中などで、気づきとして教員サイドから投げかけていくことも今後の検討課題である。学生同士が話し合

う機会を意識的に設けることで、実習の中で体験することとも含めてより効果的に、疑似体験演習－老年看護学実習での体験を自分の中に意味づけていくことができるのではないかと考えている。

沖中らは⁸⁾、老年看護学実習における学びを構造化している。それは対象理解、高齢者への関わり、老年観・看護観・死生観という内容であり、本研究の結果ともかなり類似した内容である。今後、今回得られた学生の気づきをさらに細かくコード化し構造化していくことも検討している。本研究の限界である、分析対象が学生自身の自由記載のレポートであることから、活かした学び全てが記述されているとは限らない、ということをつまみながら、より有機的で生き生きとした演習－実習のリンクを目指すために、そして優れた高齢者看護を提供できるように学生を育てるはどんな要素が必要なのかを探り、関わりの場面での教員から学生への意識付ける方法などの検討などを進めていきたいと考えている。

文 献

- 1) 橋本文子, 松下恭子, 多田敏子: 看護学生を対象とした高齢者疑似体験学習の意義－高齢者および介護者体験からの学び－, 老年看護学, Vol.7, No.1, 95-102, 2002
- 2) 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子: 高齢者疑似体験演習による高齢者のイメージと高齢者理解の変化－看護学生の高齢者イメージの自由記載の内容分析から－, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, No.11, 119-126, 2003
- 3) 柿川房子, 石川陸弓, 佐藤敏子, 甲斐衣津子, 中野正孝: 老年看護学授業展開－高齢者疑似体験演習学習に関する検討－, 三重看護学誌, Vol.3, No.1, 175-182, 2000
- 4) 岩鶴早苗, 水主千鶴子: 老人看護学における教育方法の検討－老人看護学演習と実習との関連について－, 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 第5巻, 55-61, 2002
- 5) 中村令子, 中山裕子, 清水仁美: 老年者疑似体験演習の学習効果についての検討－臨地実習での老年者とのかわりからの評価－, 岩手女子看護短期大学紀要, 第6号, 9-16, 1998
- 6) 老年看護学 老年看護の実践: ナーシング・グラフィカ 27, メディカ出版, 184-190, 2005
- 7) 安酸史子: 学生自身の体験を基にした臨床実習教育, インターナショナルナーシングレビュー, Vol.23, No.5, 30-34, 2000. 10
- 8) 沖中由美, 中野静子: 老年看護学実習における学びの分析, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 第15号, 81-87, 2002

要 旨

本学の2年次で行う、高齢者の日常生活を理解するための高齢者疑似体験演習が、3年次での老年看護学実習Ⅰでどのように生かされているのかを学生自身の言葉から明らかにし、今後の演習や実習の方法に対する示唆を得ることを目的として、老年看護学実習Ⅰの実習終了後に提出されたレポートに記載された内容を対象の理解、ケアへの発展、気づきの視点で分析した。

その結果、それぞれ1)「高齢者の実際の生活を見て体験を思い出し実感したこと」(2)「ケアプランを立て、実際の援助場面で心がけて実施したこと」(3)「全般を振り返り感じたこと」に大別された。

学生は疑似体験演習で体験した、加齢によって、身体的変化が日常生活にどのように影響を及ぼすのか、実際の高齢者を目の前にして関わるときに思い起こし、高齢者の気持ちを考えて関わりの工夫をしていた。

またあるときは自分の関わり方では相手に届かないことを実感して、個別に臨機応変に発展させ試行錯誤しながら、疑似体験演習での学びを学生の個性的であり独創的な看護になるよう相違工夫していることが明らかになった。

今後疑似体験演習での学びをより生き生きと実習の中で活かし、高めることで高齢社会に対応できるような看護職を育てていけるようにするためには、個々の学生の疑似体験演習での学びを教員が理解しながら、実際のケアの場面で適切な助言をしていくこと、カンファレンスにおいて学生の学びを発展させていくことなどが必要である。

キーワード：高齢者疑似体験演習，老年看護学実習，高齢者の理解，実習指導